

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	二重 佐知子
2. 審査委員	主査：（鳴門教育大学教授） 田中 淳一 副主査：（鳴門教育大学教授） 川上 綾子 委員：（兵庫教育大学教授） 市井 雅哉 委員：（岡山大学教授） 大竹 喜久 委員：（鳴門教育大学准教授） 高橋 眞琴
3. 論文題目	祖父母と発達障害児及び発達につまずきのある児との交流が双方に与える影響
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座 二重 佐知子から申請があった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成 30 年 2 月 11 日（日・祝）13時40分～14時40分          場所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス会議室</p> <p>（1）学位論文の構成と概要          本論文は、以下に示す5章から構成されている。</p> <p>第1章 序論          第2章 祖父母との交流が発達障害児及び発達につまずきのある児に与える影響          －保育士へのインタビュー調査及び質問紙作成とその調査－          第3章 発達障害児及び発達につまずきのある児の特徴と祖父母との関わりによる関連          －つまずきチェックシートを用いて－          第4章 祖父母は発達障害児及び発達につまずきのある孫にどのように関わっているのか          －当事者へのインタビュー調査－          第5章 研究結果の概要と総合的考察及び今後の課題</p> <p>各章の論文概要は、以下に示す通りである。</p> <p>第1章においては、発達障害児を取り巻く現状について、発達障害の早期発見と支援、発達障害児および障害児と保育所、発達障害児の母親の育児ストレス・育児不安、および就労の観点で、先行研究が検討されている。発達障害児の支援を考える上で、最も重要な援助者としての母親については、同年代の子どもを持つ母親より、抑うつや育児ストレスが高く、保護者の父母からの育児に関する協力が、育児ストレスの軽減に有効な場合があることから、祖父母による子育て支援の意義について、述べている。</p> <p>第2章においては、児と祖父母が交流することによる影響を探索的に把握するため、保育士へのインタビュー調査を実施した上で、把握した内容を実証的に明らかにするため、児と祖父母が交流することによる影響に関する質問紙を作成し、郵送調査を行っている。概ね、祖父母との交流は良いとの結果が得ており、祖父母との交流において正の影響が示唆されたサブカテゴリは、「人との関わりが上手になる・甘え方が上手になる」、「心や情緒が豊かになる」、「依存的になる」、「あいさつができる」、「絵本を見る」であった。</p> <p>第3章においては、発達障害児及び発達につまずきのある児が、祖父母と交流することによる児の行動発達上の評価への影響について、チェックシートⅢ及びつまずきチェックシート[幼稚園用]</p>

(以下つまずきチェックシート)を用いて、保育士に調査を実施している。予備調査として、小規模に保育士への聞き取り調査を行い、祖父母と交流することによって児の行動発達上の評価への影響が示唆されたため、統計的に信頼性を高めるために、対象地域、サンプル数を拡大し、本調査を実施している。

予備調査では、35名の保育士へ調査を実施した結果、祖父母の関わりにより、学習障害に関する領域の「聞く」、「話す」、「読む」に正の影響が示唆し、注意欠陥多動性障害に関する領域の「不注意」、「多動性-衝動性」や高機能自閉症に関する「対人関係やこだわり等」の領域においても正の影響があることが示唆している。本調査では、300名の保育士に郵送調査をし、104名の回答が得ている。つまずきチェックシートの調査に加え、児の属性(性別、年齢、医療機関・療育機関との関わりの有無、祖父母との関わりの有無)、祖父母の属性(続柄、児との交流の頻度、健康状態、児の障害の理解、育児協力、保護者との関係性、住居、住居距離)を調査した。その結果、児との交流の頻度では、母方祖母との交流が一番多く、祖父母の健康状態、児の障害の理解、育児協力、保護者との関係において、5~6割が概ねよいという結果を得ている。祖父母の障害の理解の程度が高い群では、児の医療機関及び療育機関との関わりが有意に多かったことも示唆している。

第4章においては、第2章で得た研究成果に基づき、発達障害児の祖父母の子育ての関与や思いを明らかにすることを目的として、7名の当事者にインタビュー調査を行っている。インタビュー内容を質的帰納的分析した結果、「孫との交流」、「障害理解」、「育児協力」、「保護者との関係性」、「関係機関との関わり支援」の5つのカテゴリを得ており、第2章、第3章の研究成果と関連した内容が得られたとしている。

第5章においては、研究結果の概要を示した上で、祖父母との関わりがある児は、人との関わり、情緒、相手の気持ちを考えられる、あいさつができる等の社会性に関して、正の影響を受けており、祖父母の障害の理解が高く、育児の協力をしているほど、さらに保護者との関係性が良いほど、注意欠陥多動性障害に正の影響があると確認している。学習障害においては、祖父母の交流が正の影響を与えていないという結果も見出している。学習障害の兆候は、学童期以降に顕かになることが多く、本研究の対象児は年齢が低いため、関係性が表れにくいことが考えられるが、発達障害児への早期支援という観点では、医療機関や療育機関における専門的な関わりとともに、個別に日常生活の中で行われる祖父母との交流は、重要な役割を担う可能性があると考えられている。今後の課題として、祖父母側からの視点以外にも、保護者の障害理解や健康状態、育児の負担感等、保護者に関しての影響について、検討することや発達障害児の様々な状態像に対しても言及することをあげている。

## (2) 審査経過

### 1) 研究目的の妥当性および研究目的と論文作成の整合性

本研究の目的は、重要な援助者の一人であるという観点から、祖父母に着目し、実際に発達障害児及び発達につまずきのある児とどのような関わりをしているのか、また、そのことにより、児と祖父母は双方にどのような影響を受けているのかについて解明することであった。包括的に研究の背景と課題の提起を行い、量的調査では、予備調査、本調査と段階を経て、綿密に研究が遂行されている。インタビュー調査においても、複数のインフォーマントに調査を実施している。発達障害児への支援は、昨今の学校教育における重要な課題の一つであり、祖父母による支援によって得られる影響を実証しようとする本論文の取り組みは、意義深いものである。

### 2) 研究方法

第2章、第3章、第4章においては、統計的に信頼性を高めること、及び祖父母の属性、発達障害児の属性及び行動発達上の評価の関係、双方が受ける影響について詳細に検討し、発達障害児と最もよく交流している祖父母の属性の回答選択肢を点数化し、祖父母の各属性の関係を検討するため、Pearsonの相関係数を求めている。本論文では、設定された研究課題について、論理的かつ客観的に研究が遂行されていると判断した。

### 3) 独創性と発展性

本研究の目的は、重要な援助者の一人であるという観点から、祖父母に着目し、実際に発達障害児及び発達につまずきのある児とどのような関わりをしているのか、また、そのことにより、児と祖父母は双方にどのような影響を受けているのかについて解明することを試みており、研究事例も国内でもあまり見られない。学校教育における重要な課題の一つである発達障害児への支援において、高く評価できるものと判断した。

## (3) 審査結果

以上により、本審査委員会は、二重 佐知子が提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。